第１４回日本柔道整復接骨医学会学術大会盛大に開催

－広報部のクタクタ日記Ｐａｒｔ５－

またまたやってきました日本柔道整復接骨医学会！１７年度は師走に入ったばかりの、それもレセプトで忙しい？１２月３日（土）・４日（日）の両日、東京の大田区産業プラザ（Ｐｉｏ）において盛大に開催されました。本県からは６名程の会員が参加し、各自がビデオを片手に各会場を走り回っていたようでした。本当に、その熱心さには感心しました。参加された会員の皆様、二日間本当にお疲れ様でした。

それでは、お待たせいたしました！今年もお届けします。独断と偏見、そしてちょっぴり自信に満ちた？「広報部のクタクタ日記」第５弾です！

尚、詳細については「日整広報１月号、ＶＯＬ１７６」をご参照下さい。

一日目

けたたましい目覚し時計で飛び起きる（ん？前にも書いたような・・)。午前４時、こんなに早く起床するのは何年ぶりだろうか。眠たい眼をこすりながら外を眺めると、暗闇の中から突然霙交じりの雨が跳び込んでくる。北陸の師走ともなればこれくらいはしかたないかと思うが、さすがに歳をとってくるとこの寒さは身体にコタエル・・・

とりあえず、レセプトを会館まで持って行く。一旦自宅に戻り、慌しく身支度を整えてから自家用車で芦原温泉駅に向う。車を駐車場に停めて、６時３分発の「しらさぎ」に飛び乗る。今年も、事前に抄録集をチェック済みなので、車中ではもっぱら読書をして過ごす。読んだのは、早熟の天才といわれた三島由紀夫の「仮面の告白」等。それにしても、何回読んでも三島由紀夫の作品は「仮面の告白」に限らず、どれも難解である。途中気分転換のつもりで「群像１２月号」を開き平野啓一郎の「金閣寺論」に目を通すが、これも三島本人の「金閣寺」以上に超難解で、小生ごときの能力ではもはや太刀打ちできない未知のとの遭遇である。これでは、気分転換どころか落ち込むだけである。悪戦苦闘しているうちにあっという間に米原に到着。新幹線に乗り継ぎ、気を取り直して本の続きを読んでいると名古屋あたりから心地よい日差しが車内に降り注ぎ、ついウトウトとしてしまう。はっと気がつけば、もうすでに新横浜を過ぎていた。東京駅で降り、京浜急行に乗り換え急いで会場に駆け込み受付を済ます。

先ず、昨年から社会医療分科会に設置された「柔整介護部会」のシンポジウムがある３階のＣ会場に入る。既に開始時間から３０分が経過していたせいか、満席状態。なんとか後ろの空席を見つけて着席し、何気なしに前の席を見ると、なにやら見慣れていてわかりやすい？後姿が・・・・・なんと平山大先生がおられるではないか！さすがに本会の介護保険担当者だけに、遅刻せずの聴講には本当に感心する。

介護保険制度が導入されて５年が経過し、来年４月からは介護予防を重視した改正介護保険制度が始まる。この介護保険に、我々柔整師がどのようにして関わっていけるのか、また関わることができるのか非常に気になるところである。今回のシンポジウムでは、実際に柔整師としてこの介護保険事業に関わっている３人のシンポジスト

の先生方が、それぞれの活動報告をしていた。整骨院と併設しているケース、時間を分けて一つの施設で整骨院とデイサービスをするケースなど、どのケースも小規模で個別的に対応できるといった整骨院としての長所を充分に活かした事業を展開している点で一致していた。さすがに、経験豊富な人たちの報告だけに大変参考になるが、いずれも「機能訓練指導員」としての活動だったので、欲をいえば「介護予防運動指導員」についても少し触れて欲しかった。最後に、コーディネーターの九州保健福祉大学の前田和彦先生が、介護保険事業は決して片手間ではできない、あくまでも福祉分野なので福祉的な内容を身につけること、柔整師の認知度はまだまだ低いため異業種である福祉の人等と一緒になって行政へのアプローチが必要といった助言をされていたが、まったく同感である。現在、整骨院を利用しているいわゆる虚弱老人が２６４万人いるといわれている。それが、介護予防の事業所に取られてしまうのであるから、我々にとったら死活問題である。これからは、ただ待っているだけではだめで、自分から積極的に探すことが必要であろう。ガンバラネバ！

平山先生と別れ、昼食を摂りに４階のレストランに向ったが満員だったため、一階の喫茶店に入る。そこで、竹内義享先生にばったりお会いする。ちょうど、明治鍼灸大学の学生と談笑されていたところで、邪魔にならないよう挨拶だけ済ませ、違うテーブルに着席して午後の部をチェックする。

チェックと昼食を終えて、学会本部主催のシンポジウム「柔道整復師の今後を考える」がある４階のＡ会場に入る。本大会のメインイベントであるシンポジウムだけに聴衆も多く、それにシンポジスト陣も豪華そのものである。‘からだサイエンス’での辛口トークでおなじみの近畿大学整形外科教授の浜西千秋先生、財団法人柔道整復研修試験財団理事長の長谷川慧重先生、米田柔整専門学校校長の米田忠正先生、日整の山口綱孝先生、明治鍼灸大学保健医療学部柔道整復学科教授の竹内義享先生らがそれぞれの立場から、養成校の乱立による柔整師の急増にどう対処していくか、今後の柔整師はどうしたらよいか等について具体的な解決策を提示されていた。先ず、浜西先生からは、今後柔整師が生き残るためには階層化（差別化）を図るべきであり、その第一歩となるのが本学会（接骨医学会）認定の認定柔道整復師制度であること、次に長谷川先生からは、柔整師卒後臨床研修制度の現状と、研修内容の充実、研修参加者・施設の確保、研修必修化など今後の課題について、米田先生からは、当学校で年々卒後は病院勤務が増加している現状と今後は学校教育だけではなく卒業後も医師の協力が不可欠であることを、山口先生からは、医接連携はもちろんのこと、是非教育制度の改革を実現しなければならないことを、竹内先生からは、整形外科で外傷（骨折・脱臼等）の技術者となる「病院柔道整復師（仮称）」が今後の柔整師の一つの方向性ではないか、また骨・関節機能に対する専門性を高めるためにも人材の育成が急務であることを、それぞれ強調されていた。

フロアからも、厳しい質問が相次ぎ、座長の信原先生が制止する場面もあり、あっという間の実に充実した２時間３０分だったのではないだろうか。

次に、急いで２階のＢ会場に向う。入ってみると、なんと立見席が出るほどの盛況ぶりである。シンポジウム以上ではないか！これには正直言って驚いた。よく見ると、最前列に斉藤（和）先生と東谷先生が、後列に山本（嘉）先生と浅田先生が熱心にメ

モを取りながら聴いている。いつもながら準備万端である。席がないため、仕方なく隅に立って聴くことにする。ここでは、スポーツ科学講習会第２部をやっており、国際武道大学教授の山本利春先生が「種目特性とリハビリテーション（個人種目）」と題して講演をされていた。実際に聴いてみると、レベルごとに具体的なトレーニング方法を実に分かりやすく説明されていたので、大変勉強になった。特に注目されたのは「体重支持指数（ＷＢＩ）」である。これは、膝の伸展筋力（kg）を体重（kg）で割った指数で、荷重運動の競技選手がケガをしやすいか、しにくいかの目安になる指数だそうである。ちなみに、競技スポーツレベルのＷＢＩは１以上、ジョギング・階段昇降レベルは０．６以上、歩行で０．４以上である。椅子から片足で立ち上がる動作が０．６だそうだから、これは実践に大いに役立つかも。これは大収穫である。これなら、第１部から聴けば良かったと後悔することしきりである。う～ん残念！

いよいよ、一日目の最後となる教育セミナーである。会場が同会場なので、前列の椅子を確保しビデオをセッティングして講演開始を待つことにする。開始時間が迫るにつれて、ぞくぞくと聴衆が入場してきてあっという間に満席になってしまった。しかし、今回はビデオと録音の許可が出ていないためご遠慮下さいとのアナウンスで、あえなくビデオを撤収する羽目に。そこで、急いでノートを取り出しスタンバイする。いよいよお待ち兼ねの講演開始である。演題は「肩関節脱臼の病態と治療」で、講師は秋田大学整形外科教授の井樋栄二先生である。先生は、先ず肩関節の構造から始まり、理学所見、整復法、固定肢位、固定期間、手術までを分かりやすく説明されていた。中でも注目を集めたのは固定肢位である。先生によると、肩関節脱臼後の再脱臼は、固定強度や固定期間には関係なく発生しているが、関節包や関節唇の剥離部位が内旋位では離れているが、外旋位では骨に密着することが分かったとのことである。このことから、固定肢位は内旋位よりも外旋位固定が有効と考えられ、実際のデータからもその有効性が裏付けられつつあるそうである。また、どの固定肢位ポジションがいいか、固定期間はどれくらいが良いかについては、現在データを収集中とのことであるから、その結果を期待したいものである。

これで、ようやく一日目が終了である。会場を後にしたのは、午後７時を過ぎていた。早朝の４時起きが徐々にこたえてきて、もうクタクタ状態。今日の疲れは格別である。今夜は早く寝ようっと・・・・・・・

二日目

午前９時３０分頃に会場に到着。そのまま固定法分科会の３階Ｃ会場に入る。

絶好の場所をゲットし開始時間を待っていると、そこへ山本（嘉）先生が到着し同席する。先ず、「距踵関節を考慮した足関節捻挫の固定」と題して、３人のパネラーによるシンポジウムが行われた。最も損傷頻度の高い外側側副靭帯の固定方法に加えて、腰痛・膝痛・股関節痛など損傷部以外の疼痛を防ぐテーピング、下肢筋のバランス異常や外反母趾を改善するテーピングなどすぐに役立つものばかりで、ナルホドナットクの実に有意義なシンポジウムであった。

その後一般会員による発表があったが、その中でも距踵関節の可動域を制限する足関節Ｘ状テーピングは興味を引いた。午前の部最後は五稜郭整骨院院長の佐藤義裕先

生の特別講演で、演題は「シンスプリントに対する柔整師スタンスによる治療アプローチ」である。シンスプリントの原因としては、従来は後脛骨筋との関連が謳われてきたが、現在はヒラメ筋などの関与が考えられるとのことである。年齢別にみるとやはり１０代が多いが中高年齢層も多く、市民マラソンをする４０～５０代や社交ダンスをする６０～７０代によくみられるそうである。種目別に見ると、意外や意外！サッカーが多いのはちょっとビックリであった。また、疼痛部位は教科書では確か脛骨内側縁中下１／３が多いとなっているはずだが、実際はこの部位は少なく中１／３や下１／３が多いとのことである。なかなか教科書通りにいかないのが、臨床の場ということか。

最後に、テーピング法について３タイプを紹介していたが、何か特殊なテーピング法があるのかと思いきや、案外簡単なテーピング法だったのでちょっと拍子抜けの感が・・・これで、午前の部は全て終了。早めにレストランで昼食を摂り、午後の部に備えることにする。

レストランを出て、整復治療手技の一般発表がある６階のＥ会場に入る。この中で、最も興味を引いたのは「筋膜療法による膝関節痛へのアプローチ」である。これは、筋膜の緊張や短縮などを取り除くことによって、膝の疼痛を減少させようとする方法である。特に、ＯＡ等膝関節内側に疼痛がある場合が有効とのことである。確かに、スライドを見た限りでは劇的に症状が改善されている。半信半疑ながらも、ウ～ン納得せざるを得ない。早速使ってみよう！

途中で切り上げ、次に学術大会委員会企画の「医接連携の多様性について」と題するシンポジウムがある１階Ｄ会場に入る。ちょうど、東京都柔道接骨師会会長の工藤鉄男先生が、東京都の取り組みを説明されていた。東京都においては、平成１０年頃より東京都臨床整形外科医会と医接連携を進めるために「整接会」を創設し、定期的に勉強会を開催するなどして、相互協力を蜜に行っているとのことである。まあ、この医接連携は本学会のメインテーマにもなっており、各都道府県の社団はもちろんのこと各支部単位においても、各地域の医療機関と医接連携が円滑に図れるよう取り組んでいかなければならないことは言うまでもないことだが‥‥

次に、竹内義享先生が発表されるということなので、急いで固定法一般発表のある３階Ｃ会場に駆け込む。竹内先生は、綿包帯と伸縮性包帯における圧迫圧を科学的データから検証し、両者の特性を発表されていた。伸縮包帯は層数が増えるにしたがって圧迫圧が大きくなり、血流が阻害される可能性がある。一方、綿包帯は固定力があるにもかかわらず、層数が増えても圧迫圧が低く抑えられているので、包帯固定を行う上で適切な材料と考えられるとのことである。確かに、近年は多種多様の固定材料があるため、固定材料としての綿包帯の使用頻度が減ってきたのは事実である。やはり、我々の基本は包帯である。もう一度基本に戻らねば！

いよいよ二日目の最後というよりも、本学会最後である。感慨深げにゆっくりスポーツ柔整・バイオメカニクス分科会合同シンポジウムがある４階Ａ会場に入る。もちろん、本県からの参加者は全員集合である。シンポジウムは、「アスレチックトレーナー教育と現場」と題して、国際武道大学スポーツトレーナー学科教授の山本利春先生、筑波大学体育科学系助教授の白木仁先生、東京ヴェルディ１９６９アスレチック

トレーナー（柔整師）の久保田武晴先生が、それぞれの立場で詳しい活動報告をされていた。

この中で特に印象に残った言葉は、「トレーナーに求められるものはトレーナーとしての技能・技術、コーディネート能力（コミュニケーション能力）である。」「トレーナー教育とは、ボランティア精神を基軸において、人のために尽くすことのできる人材を育成することにある。」などである。人格、技量が優れ、かつ奉仕精神のかたまりで縁の下の力持ちといったところか。大変な仕事であることを改めて認識する。その他、各スポーツ競技に関する理解とコーチ・トレーナー・医師との連携が必要不可欠であると強調されていたが、まあこれは当然であろう。

帰りの新幹線の時間の関係もあって、最後の久保田先生の報告を聴くことができないのが残念だが、本県の先生方に別れを告げて、一足お先に会場を後にする。外へ出ると、雨が降っていた。足早に京浜蒲田駅に向かいホームに滑り込んできた電車に飛び乗る。途中品川駅で乗り換えて東京に到着。東京駅では、
いつも通りの光景が繰り広げられている。出張風のサラリーマンや旅行客が、名物の東京ばななや東京いちごの売店に殺到している。「相変わらすだなあ」と苦笑しながらも、自分もしっかりと買ってしまった！弁当と必需品である缶ビールも忘れずに買い、重い足を引きずりながら新幹線に乗る。ビール片手にだんだん遠くなっていく東京の夜景を見ながら、静かにこの二日間を振り返ってみる。今年も数え切れないほど収穫があった大変充実した接骨医学会であった。今後も、体力と気力が続く限り参加し続けたいものである。もちろん、毎年快く送り出してくれる家族への感謝の気持ちは忘れてはならない。それにしても、疲れた時のビール（酒なら何でもいいが･･･）はもう最高！全てに満足、満足である。（完）

（文責　森瀬　則昭）